No.79
30th September 2024

NEWSLETTER

国際音楽資料情報協会日本支部

ISSN 2432-6135
(online)

International Association of Music Libraries, Archives and Documentation Centers, Japanese Branch

第 75 回支部例会報告・2024 年総会報告

【目次】

○第 75 回支部例会報告
講演要旨（高野真理子）p. 1
傍聴記（加藤信哉）p. 4
○2024 年総会報告　p. 6
○事務局だより　p. 10

第 75 回支部例会報告

【講演要旨】

曲がり角を迎える図書館の目録(1)
NACSIS-CAT を巡って

1．はじめに

本発表は、NACSIS-CAT（National Institute of Informatics Cataloging System）を巡る図書館目録の転換期について議論するものである。NPO 法人大学図書館支援機構（通称 IAAL）を設立した際にモデルにした北米の書誌ユーティリティーと参加館をつなぐリージョナル・サービス・プロバイダー(1)に倣い、NACSIS の研修等の支援を行ってきた立場で、個人的意見を述べる。これは 2017 年に『情報の科学と技術』に書いた「目録技術に未来はあるか」(2)の続編にあたるものである。

NACSIS-CAT はデータの蓄積である。最初にそれを支えた「人」の観点で歴史(3)を概観する。

・草創期：1995 年から 1997 年に「新 CAT/ILL」になったのは、インターネットとコンピュータ技術、文字の扱いが劇的に進化したことと対応している。次第に参加館やデータ量が増え、研修体制の整備が進んだ。「書誌ユーティリティー課題検討プロジェクト」であらためて質の問題に真剣に向き合っていた時代に、目録の道具となる『目録情報の基準』やコーディングマニュアルの整備が併せて行われた。

・CAT2020：最初の目録の「価値観＝質」の曲がり角は、「次世代」の在り方を検討され始めた頃から起こってきたと考える。検討の結果 CAT2020 と呼ばれる転機を経験して、現在の目録データベースには CAT2020 以前と以降のデータが混在しはじめている。

・NCR2018 へ：次に今年 2024 年の 10 月に NCR2018 年版準拠という「目録法」の曲がり角を迎えることになる。

最初の曲がり角は CAT2020 でもたらされた「質」の変化と捉える。「質」というのは話し手の「価値観」に他ならない。筆者の価値観は、大学図書館勤務の間に国立情報学研究所（NII）の総合目録小委員会のメンバーとして経験した『目録情報の基準』第 4 版とコーディングマニュアル 7 章作成、それと 2013 年に来日されたバーバラ・ティレット女史から聞いた RDA の世界観がベースである。

2．目録の「価値観」の曲がり角

NACSIS-CAT のデータ全体を俯瞰し、CAT2020 以前のデータ（1985 年から 2020 年までの 35 年間の蓄積）と CAT2020 以降で「価値観」の異なるデータが混在している状況をいくつか紹介する。

・CAT2020 以前：書誌レコードに重複がないこと、すなわち 1 書誌 1 レコードがデータベースの品質の目安であった。このため、重複レコードを作成しないためのキャッチフレーズ「あれば使う・なければ作る」という共同分担目録の精神や、作成館の考えを尊重しようという修正指針、参照ファイルを流用入力する時の注意

事項がまとめられた。これらは、最初に良いデータを作ることが後からレコード調整や修正作業が軽減するという考え方に基づいていた。

・CAT2020 以降：CAT2020 の価値観は、2018 年の「NACSIS-CAT/ILL の軽量化・合理化について（最終まとめ）」[4]に 8 つのポイントとしてまとめられている。そこには、システム追記のように「データが豊かになる」ことがデータベースの質だという考え方が垣間見られる。そして、外部機関作成書誌データ（すなわち参照データだった MARC）がそのまま使えれば、業務が軽減できるという発想の下に、参照ファイルのデータを PREBOOK として用意し、それに所蔵登録すれば自動的に総合目録データベースの書誌に移行できるという仕組みができた。

もう一つは、参加館同士のレコード調整という大きな業務負担をなくそうという方策である。この結果、同一資料に対して複数書誌ができることは予測されており、2016 年の「NACSIS-CAT/ILL の軽量化・合理化について（基本方針）」[5]頃までは、同一資料に対する複数書誌は、システム的にマージできると考えられていたようである。しかし、機械的な同定が容易ではないことが判明し、同等とみなせるものを「並立書誌」として許容する「最終まとめ」の形となった。

共同で目録データを蓄積していく上で、同一資料に複数書誌ができてしまうことは容認しつつ、一方で、重複はない方が良いという価値観も残っている。「最終まとめ」のポイント⑥には「重複書誌データを再定義（書誌データの内容がほとんど同一で、違いが無視できる場合）し、これらを NII で統合処理する」と書かれている。このためデータベース内に並立書誌が少しずつ混じってきている。重複を発見した参加館が NII に報告できる窓口はあるが、重複か並立かの線引きは、情報源を確認せずには困難だと思われる。

また、参加館同士のレコード調整が負担になっていたことが事実だとしても、単に情報源を確認し合うだけでなく、意見交換によって目録担当者が厳しく鍛えられる人材育成の場になっていた面も見逃せない。

1 書誌 1 レコードの基本が崩れている状況を、利用者はどう見るだろうか。ことに特定の資料を探す既知検索においては、資料の識別・選択が困難だろうと思われる。また、これから先の曲がり角である新たな目録法の考え方に移行するには、ID が重要である。しかし、ID が固有の識別子の役割を失っていると難しくなるのではないだろうか。個人名などの名寄せや重複レコードの統合は、機械的には蓋然性の判定が限界で、目録の質を担っているのは「人」の判断であると考える。

3．「担い手」の曲がり角

目録作業は、NACSIS-CAT など書誌ユーティリティーや参照データを使って、コピーカタロギングや所蔵登録のみで簡単にできるようになってきている。CAT2020 はそのことをより推し進めた。さらに、目録業務の専任職員は削減される傾向にあり、OJT で書誌作成の経験を積むことは難しい状況になっている。

また、目録業務には共通したマニュアルがあり、どの図書館でも似たような作業だと捉えると、図書館業務の中で、最も委託に向いているということができる。目録作業の経験値はアウトソーシングによって、非専任職員に蓄えられていくだろうと思われる。しかし、委託の単価は競争入札の原理で下げられ、競争入札で落札した会社は、元のスタッフを居抜きで雇い、待遇は入札のたびに下がっていく仕組みに陥りがちである。「目録のスキル」があることの評価基準がなく、時給が減っても「図書館の仕事が好き」という委託スタッフの善意で支えられている状況で良いのだろうか。「担い手」の曲がり角における問題は、そのことに図書館が気づいていないことだと考える。IAAL はこの負のスパイラルを逆転させるバネになるのは、目録のスキルがある人を評価する基準を作ることだと考え、認定試験[6]を行なってきた。しかし CAT2020 によって正しい記述

の目安がなくなり、中止せざるを得なくなってしまった。「担い手」の曲がり角は、じわじわとゆっくりしたカーブで訪れてきている。

4．「目録法」の曲がり角

NACSIS-CAT の準拠する目録規則が、和資料は日本目録規則 1987 年版改訂 2 版、洋資料は英米目録規則第 2 版（AACR2）から、和洋とも日本目録規則 2018 年版（以下、NCR2018 年版）に変更される。このことは、これからの学術情報システム構築検討委員会のホームページで広報されている（NCR2018 年版の説明は、IAML 日本支部第 65 回例会要旨 (7) を参照）。

準拠する目録規則が変わることの目的・意味合いを考えてみよう。第一に国際化を意識したものだと捉えることができる。2017 年に IFLA の目録法が変わった状況において、参照ファイルや PREBOOK のデータを正確に利用するためにも、記述方法を国際標準に沿うようにしなければならない。

目的の二点目は、新しい目録法、すなわち関連・繋がることを意味する目録の考え方に変えていくことであろう。NACSIS-CAT の CATP フォーマットは当初から「リンク形成」という方法で、リンクトデータに親和性があり、実体の ID と関連の仕組みに読み替えることができる。2013 年にバーバラ・ティレット女史が来日した際に、IAAL で懇親会を行った時、NACSIS-CAT のデータベース構造が「関連」のリンクで繋がる構造をもっており、RDA（Resource Description and Access）と親和性があると私見を述べた。これに対して、その当時、NII が VIAF（バーチャル国際典拠ファイル）への参加を検討していることは素晴らしい進展だというコメントがあったと記憶している。即ち、中で繋がるデータ構造をもつということ以上に、外と繋がること、ID や標準番号をもつことが大事だと言われたと理解している。

NCR2018 年版準拠に変わることに向けて、NACSIS-CAT のクライアントシステムの改修も一部必要になるだろうが、何より、担い手である目録担当者が新しい考え方を理解する必要がある。書誌情報の在り方や目録理論に関する知識の上に、利用者にとって良質なデータ作成ができる担い手が求められる時だと思う。

図書館の仕事は求人広告にあるような「誰にでもできる簡単なお仕事」ではない。操作が難しいのではなく、技術や知識に裏付けされた判断力が必要になる。常に利用者のニーズに立ち返り、インターネット社会で通用する仕組みに則って、例えば、「著作」データの在り方、コンテンツ（表現）種別の活かし方、電子ジャーナルや電子ブックの扱いなどを、実務者間で議論する中で解決策を見出す力を養うこと (8) が大事なのではないかと考えている。

5．NCR2018 年版についての私見（補足）

そもそも「日本目録規則」である必要があるか疑問である。AACR2 が Anglo-American であることを止め国際化を唱え、Cataloging Rules の名前を捨て 2010 年に RDA を作成したことには意味がある。「新しい『日本目録規則』（新 NCR）」に対するパブリックコメントで、英米目録規則の第 3 版が刊行されないことを知りつつ、日本特有の規則を作成したことは、言うなれば国際化に逆行する「鎖国化」だとする私見を日本図書館協会目録委員会に 2017 年に提出した。その後 RDA は公表後 10 年間に再構築、再設計の検討が行われ、2020 年に公式版 Official RDA が公開された。RDA 公式版はより国際的に展開し、その VES（語彙エンコーディングスキーム）は日本語を除く世界各国語で用意されている。

また、Official RDA toolkit で特筆すべき点は、記述方法は目録作成機関が決めるという設計である。いわば、RDA は基本構造・デザインを示すだけで、記述方法の規定は目録作成機関に委ねられた。Library of Congress, British Library, Music Library Association などのポリシーステートメントが RDA toolkit の中に組み込まれ、次々増えてきている。こうなることがわかっていれば、日本目録規則に当た

るものは、日本のポリシーステートメントおよび日本語 VES の形で加わればよかったのにと悔やまれる。

もう一つ NCR2018 年版の残念な点は、2017 年に公表された国際標準である IFLA LRM に追いついていないことである。具体的には主題典拠データの機能要件が盛り込まれる前の目録法で固まっている。言い換えれば、ユーザタスクとして、発見・識別・選択・入手で止まっており、Explore（探索）情報源を文脈で捉えることを意識したものではない。

(1) 「海外書誌ユーティリティー調査報告書」平成 18 年度. 目録所在情報サービスを対象とする講習会等に関する検討ワーキンググループ. p. 9-16. 2006. https://contents.nii.ac.jp/sites/default/files/catill/2022-03/study_report.pdf
(2) 高野真理子. 目録技術に未来はあるか. 情報の科学と技術. 67 巻 8 号, p. 422-425. 2017. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jkg/67/8/67_422/_pdf/-char/ja
(3) 参考：目録所在情報サービスの沿革. https://contents.nii.ac.jp/catill/about/cat_ill/history
(4) NACSIS-CAT/ILL の軽量化・合理化について（最終まとめ）. https://doi.org/10.20736/0002000919
(5) NACSIS-CAT/ILL の軽量化・合理化について（基本方針）. https://contents.nii.ac.jp/sites/default/files/korekara/2021-02/korekara_doc20160629.pdf
(6) IAAL 大学図書館業務実務能力認定試験. https://www.iaal.jp/examination/index.shtml
(7) IAML 日本支部第 65 回例会「新しい日本目録規則（NCR2018）から見えてくる未来」. Newsletter. 65, 2019.1. 伊藤真理「近年の目録理論の変遷と背景」p.2-3, 鳥海恵司「日本目録規則 2018 年版で変わる書誌・典拠データ」p. 3-8. https://www.iaml.jp/newsletter65.pdf
(8) 私立大学図書館協会東地区部会研究部スキルアップ研修 RDA3R コースを 2022、2023 年度に実施。

（高野（たかの） 真理子（まりこ））

NPO 法人大学図書館支援機構

【傍聴記】

IAML 日本支部第 75 回例会は、2024 年 6 月 1 日（土）の午後、zoom によるオンライン形式で開催された。講師は高野真理子氏（NPO 法人大学図書館支援機構：IAAL）、演題は「曲がり角を迎える図書館の目録（1）NACSIS-CAT を巡って」であった。講師の高野氏は、大学図書館に 30 年間勤務し、雑誌全般、レファレンス業務、図書目録等とシステムを担当された。2007 年に NPO 法人大学図書館支援機構を設立し、国立情報学研究所（NII）主催の目録システム講習会講師や私立大学図書館協会東地区研修分科会等を通して図書館のスタッフ研修に従事している方である。ご講演は綿密に構成された資料に基づき、豊富な実例を交えた大変わかりやすいものであり、NACSIS-CAT の曲がり角の内実が浮き彫りになった。

傍聴記としては異例かもしれないが、本稿では、ご講演では言及の少なかった NACSIS-CAT の概要と特徴について整理し、それに基づいて NACSIS-CAT の三つの曲がり角について要約・コメントし、最後に NACSIS-CAT の今後について私見を述べる。

NACSIS-CAT の概要と特徴

NACSIS-CAT は、オンライン共同分担目録方式により全国規模の総合目録データベース（図書/雑誌）を形成するためのシステムである。NACSIS-CAT は 1985 年度から開始され、現在、国立情報学研究所（NII）が管理・運用を行っている。大学図書館などの 1300 を超える参加館が NACSIS-CAT に入力した図書 1340 万件、雑誌 36 万件の書誌データは自館の OPAC（オンライン利用者用目録）の構築にも利用されている。また、図書 1 億 4682 万件、雑誌 456 万件の総合目録データベースを利用して、各図書館が自館で所蔵していない資料を相互に提供する「図書館間相互協力」を実施している。NACSIS-CAT は我が国の大学図書館の目録・資料提供業務の基盤であるといってよい。

NACSIS-CAT には次のような特徴がある（あった）。

① 同じ資料に重複した書誌データを作成しない（1 書誌 1 レコード）。そのため、重複した書誌レコードは参加館が調整を行い、統合する（書誌レコード調整）。
② 書誌データの作成単位は同一の本タイトル（固有のタイトル）、著者等によって書誌的

に他と区別できる資料である。その資料が複数の巻冊次等から構成される場合でも巻冊次等ごとに書誌データを作成しない。

③ 外部フォーマットは事実上の国際標準である MARC21 ではなく、独自のフォーマット（CATP）である。

④ 参加館の担当者であれば、誰でも目録データを作成し、修正することができる。

⑤ 和資料は「日本目録規則 1987 年版」、洋資料は「英米目録規則第 2 版」（1978）に準拠している。

⑥ 著者や統一書名等の典拠ファイルと図書や雑誌の書誌レコードのリンク（典拠作業）は任意である。

⑦ 主題索引（件名標目等）の入力は任意である。

NACSIS-CAT の三つの曲がり角

第一の目録の「質＝価値観」の曲がり角は、システム更新を契機とした NACSIS-CAT の軽量化・合理化を目指した「CAT2020」によって起こった。これにより上記の①と②が変更された。具体的には同じ資料について重複レコードの作成が許容され、参加館による書誌レコード調整は廃止された。また、書誌データの作成単位は出版物理単位（巻冊次等ごと）となった。これらは総合目録としての NACSIS-CAT の本質にかかわる大きな変更である。2020 年以降は、新基準と旧基準で作成された目録レコードが混在するので、既知文献の検索で利用者の混乱を招くものであろう。上記③について変更はなかった。

第二の「担い手」の曲がり角は、目録の質にも関連する。1985 年に NACSIS-CAT が運用を開始して以来、分担目録作業によって、労働集約的であった大学図書館の目録作業の合理化や目録データの質の平準化が行われた。一方で、目録データの遡及入力が各大学図書館で行われ、業務量の点から外部委託が進み、同時に目録担当者の定員削減も進行した。目録担当者の研修や資質を含め様々な問題が提起された。上記④の誰でも目録データの作成と修正ができるという特徴が逆に作用している。

第三の目録法の曲がり角は、2024 年 10 月からの「日本目録規則 2018 年版」への準拠である。これにより 40 年近く続いた上記の⑤が廃止され、和洋資料が同じ目録規則で取り扱われることになる。伝統的に大学図書館では和資料と洋資料には別の目録規則が適用されてきた。今回の目録規則の変更がこれに画期を開くのかどうかを見守りたい。「日本目録規則 2018 年版」への準拠は上記⑥の典拠作業や⑦の主題索引作業の改善とほとんど関係がないようである。

NACSIS-CAT の今後

NACSIS-CAT では電子ジャーナルや電子書籍について取り扱いが定められているが、目録データの入力は進んでいない。そのため、このような電子リソースの管理や利用については各参加機関で別のツールで行われている。紙と電子リソースの総合目録の構築は将来構想の段階のようである[(1)]。

現在、図書館メタデータフォーマットの主流である MARC は時代遅れで現在の環境に適合していないという批判があり、国立図書館や図書館システムの開発者はリンクトデータ（Linked Data）の方式を書誌モデリングに適用している。この目的に沿って米国議会図書館は BIBFRAME を設計し[(2)]、NACSIS-CAT では「外に向けてつながる目録（LOD: Linked Open Data）」は次のステップとして位置づけられているようである[(3)]。ひょっとすると、ローカルフォーマットである上記③の CATP の標準化の問題は、リンクトデータへの対応によって吸収されるかもしれない。

*
* *

高野氏のご講演では、基本的にカタロガー（目録作成者）の立場から、国際的な標準化を重視しつつ、目録の質や利用の問題も含めて NACSIS-CAT について厳しい指摘が随所にあった。一方で、大きなレガシーを持つ NACSIS-CAT のシステム移行の場合、その継続性や安定した運用を考えると抜本的

な変更が難しく段階的にならざるを得ないのも事実であろう。

曲がり角の途中にある NACSIS-CAT が、紙と電子リソースの総合目録の構築、リンクトデータへの対応を経て、それほど遠くない将来に国際的な互換性を持つシステムへ変容することを望みたい。

(1) 坂口幸治「新 NACSIS-CAT/ILL の変更点と今後の予定について」NII 学術情報基盤オープンフォーラム（2024 年 6 月 12 日）［講演資料］ https://www.nii.ac.jp/openforum/upload/20240612_of2024_korekara_4_sakaguchi.pdf.

(2) Alemu, Getaneh. The Future of Enriched, Linked, Open and Filtered Metadata: Making Sense of IFLA LRM, RDA, Linked Data and BIBFRAME. Facet Publishing, 2022. p. 234.

(3) 木下直「新 NACSIS-CAT/ILL の NCR2018 適用について」NII 学術情報基盤オープンフォーラム（2024 年 6 月 12 日）［講演資料］ https://www.nii.ac.jp/openforum/upload/20240612_of2024_korekara_3_kinoshita.pdf.

（加藤（かとう） 信哉（しんや））

NPO 法人知的資源イニシアティブ

2024 年支部総会報告

日時　2024 年 6 月 1 日（土）13:00〜14:02

場所　オンライン（Zoom）

出席　伊藤真理、加藤信哉、加納マリ、児玉瑞穂、田島克実、田中伸明、鳥海恵司、野川夢美、樋口隆一、山本宗由、由上渓子、桐朋学園大学附属図書館、同朋大学・名古屋音楽大学図書館（前田利明）、株式会社トッカータ。（14：五十音順、敬称略）

委任状提出：朝倉紀之、荒川恒子、伊東辰彦、植田栄子、金井喜一郎、工藤哲朗、坂巻彩華、清水拓哉、関根敏子、友利修、中西紗織、中山真衣、星野宏美、宮崎晴代、美山良夫、柳澤健太郎、大和紘子、エリザベト音楽大学附属図書館、大阪芸術大学図書館（大倉博）、国立音楽大学附属図書館、昭和音楽大学附属図書館、東京音楽大学付属図書館（信時裕子）、日本データベース開発株式会社（金田幸弘）、民音音楽博物館（小園和也）、武蔵野音楽大学。（25：五十音順、敬称略）

資料

① 2023 年活動報告及び 2024 年活動計画*

②-1 IAML2023 年決算*

②-2 IAML 日本支部会計監査 配布資料

③ IAML2024 年予算案*

*がついている資料については 7–9 ページに掲載。

議事

Ⅰ 開催挨拶 支部長 樋口隆一

役員のみならず支部長に就くのは初めてである。支部の状況は把握しつつある。支部財政の見直しが喫緊の課題であり、会員の皆様に共通認識していただきたい。

Ⅱ 総会成立の確認 会員数 58 定足数 30

出席者 14、委任状提出 25、合計 39。

定足数 30 を満たしているので総会成立。

Ⅲ 議長選出 愛知淑徳大学 伊藤真理氏

Ⅳ 報告事項

1. 2023 年度活動報告（資料①）

2. 2023 年度決算報告並びに会計監査報告（資料②-1、②-2）

監査担当から、2006 年以来の支部財政状況、2016 年以降の本部会費と支部分担金の推移について詳細なレビューがあった。また、今期について財政状況が厳しいこと、会計担当の努力で支出が限界まで抑えられ、繰越金が増えていること、本部への分担金の会費に占める割合が大き過ぎることが支部財政の根本的な問題であること、独自収入の必要性について指摘があった。これに対して支部長から支部の財政が危機的状況にあることは認識している、日本音楽学会で本支部についての啓蒙を行い、会員の増加を図ること、本部分担金の比率を見直すこと、収入を増やし、会員に対して良いサービスを行うことを考えたいとの発言があった。

（本文は 10 ページへ続きます）

資料①

2023 年活動報告および 2024 年活動計画

	2023 年活動報告	2024 年活動計画（中間報告及び予定）
国際大会	ケンブリッジ大会 2023 年 7 月 30 日（日）～8 月 4 日（金） ケンブリッジ大学音楽学部で対面により開催	ステレンボッシュ大会 2024 年 6 月 23 日（日）～6 月 28 日（金） ステレンボッシュ大学音楽院で対面開催の予定。
総会	2023 年 6 月 3 日(土) オンライン（zoom）にて開催。 （出欠確認や委任状については Google Forms を利用）	2024 年 6 月 1 日(土) 13：00 オンライン（zoom）にて開催予定。
役員会	2023 年 3 月 3 日（金）　オンライン会議 2023 年 5 月 24 日（水）オンライン会議 2023 年 10 月 19 日（木）オンライン会議	2024 年 4 月 13 日（土）　オンライン会議 2024 年 5 月 21 日（水）オンライン会議
支部例会・集会	第 73 回例会　2023 年 6 月 3 日（土）オンライン開催 【講演】「南葵音楽文庫について－和歌山県立図書館での公開から 5 年を経過して」 講師：美山良夫氏（慶應義塾大学名誉教授、南葵音楽文庫研究員） 第 74 回例会 2024 年 1 月 20 日（土）オンライン開催 【講演】Website「信時潔研究ガイド」を巡って 講師：信時裕子氏（東京音楽大学付属図書館）	第 75 回例会　2024 年 6 月 1 日（土）オンライン開催予定。 【講演】曲がり角を迎える図書館の目録について（1）「国立情報学研究所の NACSIS-CAT を巡って」 講師：高野真理子氏（特定非営利活動法人　大学図書館支援機構） 第 76 回例会　予定
ニューズレター	第 75 号 2023 年 1 月 17 日刊行（既刊） 2022 年プラハ大会参加報告 第 76 号　2023 年 5 月 1 日刊行（既刊） 第 72 回研究例会 第 77 号 2023 年 11 月 20 日刊行（既刊） 第 73 回研究例会・2023 年支部総会報告	第 78 号 2024 年 5 月 31 日刊行（予定） 第 74 回研究例会 第 79 号 2024 年 第 80 号　2024 年
ホームページ・SNS 更新	IAML プラハ大会の録画公開のお知らせ（1／13） 会員専用ページ及びフレンズの専用ページの運用開始の運用開始（6／25） ニューズレター掲載　第 75 号（1／19）、第 76 号（5／2）、第 77 号（11／20） 第 74 回例会案内（12／25）	総会・第 75 回例会案内（4／30） ニューズレター掲載　第 78 号（予定）
その他	本部への会費送金　364,875 円（4／18）	本部への会費送金　446,226 円（4／5）

資料②-1

IAML日本支部 2023年決算（ 自　令和 5年 1月 1日　 至　令和 5年12月31日 ）

費　　目	2022年繰り越し 2023年予算	2023年決算	予算決算差額	備考
前年繰越:				
現金	0	0	0	
ゆうちょ	560,095	560,095	0	
（内　会員会議参加補助基金				¥127,000
三菱東京UFJ銀行	204,498	204,498	0	
（小　計）【a】	764,593	764,593	0	
収入:				
未収会費				
2022年以前				
個人	12,000	6,000	-6,000	退会者1名未入金
団体	0	0	0	(入金依頼継続中)
会費2023年				
個人	96,000	84,000	-12,000	2名未納
団体	14,000	28,000	14,000	1団体入会により増
利息	0	1	1	
会費2024年			0	
個人	234,000	138,000	-96,000	予算時39名→40名
団体	266,000	182,000	-84,000	19→18団体(上野学園退会) 5団体未納
雑収入	0	10,000	10,000	音楽図書館協議会より、研修会共催による事務手数料
（小　計）	622,000	448,001	-173,999	
会員会議参加補助基金	0	0	0	
フレンズによる支援金	9,000	12,000	3,000	2022年より開始、4名
寄付金	24,000	33,000	9,000	
非会員例会参加費	0	15,000	15,000	2023年より開始
（収入小計）【b】	655,000	508,001	-146,999	
収入総額 【c】＝【a】＋【b】	1,419,593	1,272,594	-146,999	
支出:				
本部宛会費送金【d】	364,875	364,875	0	2458.40EUR×148.4円
予備費　　【e】	10,000	10,000	0	故松下鈞氏供花
経常経費:				
RILM分担金	40,000	40,000	0	2022年より40,000円の減額
大会代表派遣費	100,000	0	100,000	
ニューズ･レター	15,000	0	15,000	原稿料ほか
会議費、例会費	10,000	0	10,000	
交通費	10,000	776	9,224	役員会等オンライン実施
通信費	30,000	15,034	14,966	選挙関連、会費請求郵送費
消耗品費	10,000	0	10,000	
雑費	20,000	11,177	8,823	振込手数料、印刷費
アルバイト代	0	0	0	
HP運営費	27,588	27,588	0	
（経常経費小計）【f】	262,588	94,575	168,013	
会員会議参加補助基金【g】	0	0	0	
支出総額 【i】=【d】+【e】+【f】+【g】	637,463	469,450	168,013	
次年度繰越　【j】=【c】-【i】	782,130	803,144	21,014	

次年度繰越金	
現金	12,000
郵便局	395,520
（内　会員会議参加補助基金	（￥127,000）
銀行	395,624
総額	803,144

IAML日本支部 2023年決算報告において、関係書類を厳正に監査しましたところ、全て適正かつ妥当に処理、記載されていると認めます。

2024年　5月10日
IAML日本支部会計監査
田崎克英

第45期

資料③

IAML2024年予算案

費　　目	2024年予算	2023年決算	予算決算差額	備考
前年繰越：	2023年繰り越し			
現金	12,000	0	12,000	
ゆうちょ	395,520	560,095	-164,575	
（内　会員会議参加補助基金）				¥127,000
三菱東京UFJ銀行	395,624	204,498	191,126	
（小　計）　【a】	803,144	764,593	38,551	
収入：				
未収会費				
2023年以前				
個人	18,000	90,000	-72,000	2名未納(退会者1名2年分)
団体	0	28,000	-28,000	
会費2024年			0	
個人	102,000	138,000	-36,000	17名未納
団体	70,000	182,000	-112,000	5団体分未納
利息	1	1	0	
会費2025年				
個人	240,000	0	240,000	40名(退会2名、入会3名)
団体	252,000	0	252,000	18団体(1団体退会)
雑収入	0	10,000	-10,000	
（小　計）	682,001	448,001	234,000	
会員会議参加補助基金	0	0	0	
フレンズ支援金	15,000	12,000	3,000	5名
会員サポート・支部活動支援基金	40,000	33,000	7,000	
非会員例会参加費	20,000	15,000	5,000	20名
（収入小計）【b】	757,001	508,001	249,000	
収入総額 【c】＝【a】＋【b】	1,560,145	1,272,594	287,551	
支出：				
本部宛会費送金 【d】	446,226	364,875	81,351	2700.80€×165.22円
予備費　　【e】	10,000	10,000	0	
経常経費：				
RILM分担金	40,000	40,000	0	
大会代表派遣費	100,000	0	100,000	2024年ステレンボッシュ大会対面実施
ニューズ・レター	15,000	0	15,000	原稿料、印刷費
会議費、例会費	15,000	0	15,000	講演料
交通費	45,000	776	44,224	
通信費	15,000	15,034	-34	
消耗品費	5,000	0	5,000	封筒等
雑費	12,000	11,177	823	振込手数料等
アルバイト代	0	0	0	
HP運営費	27,588	27,588	0	HPサーバ(GMO)利用料
（経常経費小計）　【f】	274,588	94,575	180,013	
会員会議参加補助基金 【g】	0	0	0	2024年ステレンボッシュ大会申込者なし
支出総額 【i】＝【d】＋【e】＋【f】＋【g】	730,814	469,450	261,364	
次年度繰越　【j】＝【c】-【i】	829,331	803,144	26,187	

（本文は６ページから続きます）

３．会員の異動（2024.5.31 現在）退会：2 名、1 団体（佐々木勉、山田高誌、上野学園図書館）、入会個人 3 名（児玉瑞穂、高橋大海、由上渓子）

４．その他

・会員等による団体会員図書館の利用について。2023 年は試行について 5 団体の協力を得たが、システム改修や運用マニュアル・体制の整備に手間取り、試行を行うことができなかった。2024 年については準備が整ってから連絡し、改めて相談する。（加藤）

・ニューズレターの編集状況について。第 78 号は 5 月 31 日刊行予定で作業を進めていたが、遅れている。原稿が揃い次第発行したい。（田中）。

Ⅴ 審議事項

１．2024 年活動計画（資料①）【承認】

２．2024 年予算案（資料③）【承認】

３．ステレンボッシュ（南アフリカ）国際大会代表出席者：適任者がいないため、今年は代表者を派遣しない。【承認】

Ⅵ その他

支部長から、RISM との連絡窓口について中間報告。支部内の RISM とのリエゾンを田中役員にお願いしているが、RISM そのものの日本の窓口についても検討している。議長から支部のリエゾンの役割について補足説明があった。

Ⅶ 議長解任

Ⅷ 閉会

事務局だより

〇会費納入のお願い

2024 年 10 月中に、2025 年度（2025 年 1 月～2025 年 12 月）の会費納入の書類を送付予定です。支部の円滑な運営のため、できるだけ早い納入にご協力を賜りますようお願い申し上げします。お問い合わせは、会計・野川（nogawa★tohomusic.ac.jp;メール送信の際は★を@に変えてください）までお願い申し上げます。

〇ニューズレターの公開

77 号（2023 年 11 月 20 日発行）よりニューズレターは、発行後 1 年間は「支部会員およびフレンズ」のみが独占的に閲覧可能なよう、運用が変更されました。一般公開は、刊行後 1 年を経たものから順次行われます。刊行から 1 年に満たないバックナンバーを閲覧の際には、本支部ホームページの専用ページにアクセスいただき、事務局から会員宛に通知されている ID、パスワードを使っていただくことになります。よろしくお願い申し上げます。

〇支部メーリングリストについて

これまで使用していたメーリングリスト「メル配くん」の無料プランが終了し、現在支部メールからの一斉送信に切り替えております。77 号以降のニューズレターへのアクセス方法もメールでご案内しております。支部からのメールが届いていない方がいらっしゃいましたら、お手数ですが事務局までご連絡ください。ご協力をお願い申し上げます。

Newsletter - 国際音楽資料情報協会日本支部
第 79 号
（2024 年 9 月 30 日発行）

国際音楽資料情報協会（IAML）日本支部
〒182-8510　東京都調布市若葉町 1-41-1
桐朋学園大学附属図書館内（担当：田中）
https://www.iaml.jp